

あらうけれども、過ぐる時刻も程あらずと仰せられた、實にそれはさうお感じであつたであらうが、殊に吾等に教へる爲に仰しやつたのである、その辛い場合にも信仰の光があれば、悦びに變つて、時間の經つのも、早や經つたかと思ふやうになると云ふことを教へられた、この位適切な宗教の御利益は無い、それが本當の御利益である。雪の中に流されて不自由な生活をして居つても、時間の經つのが分らぬ程早かつたと云ふ所に、其處に法華行者の御利益が現はれて居るのである。

それからその歡喜が、唯だ前に言ふが如く、酒でも飲んでの悦びならば、笑ひ上月ならば無意義にゲラ／＼笑ふて、洵にだらしの無いものである、又怒り上月ならば詰らぬ事に腹を立てるから、迷惑至極であるけれども、信仰から來る悦びと云ふものは、だらし無く涎を流して居るやうなものは違ふ、其處を考へなければならぬ、そんな出來損つた悦びを難有い／＼と、涎ばかり流して居る信者もあるけれども、それはちよつと信仰が中風に罹つて居るのである。宗教の眞の信仰の悦びの中には、一つの引締

つた精神が現はれて來る、同じ悦んでもニコ／＼笑ひで、涎を流してゲタ／＼笑つて居るのは違ふ、其處が大事である。さうしてその悦びの中よりして、徳を産出すと云ふ考が、同時に起るのであります、この悦びを分たうと云ふ所の、善を爲す道徳性と云ふものが、悦びの中から湧いて來る、それは不思議な事である、宗教を信心して御覽なさい、その人が親切になつて來る、人の苦を聞いてその苦を抜くべく考へてやゝ、即ち人の爲に親切な考を有つて來ると云ふことが、信仰に續いて直ぐ現はれて來る、自分の精神に悦びを得ずして人を救はうとしたならば、それは失敗である、何故かと云へば自分の足許がグラ／＼なんだから、人の事をあゝ氣の毒だなと思つて、人の手を引いてやつても、却つて自分の方がグラ／＼で、その人に助けて貰ふやうぢや、手を引かれた方が迷惑である、人を救つてやらうと云ふには、己れが詰らぬ事で精神の動搖しないやうに、鞏固な安定を得なければならぬ、それを得ない限りには、人を救ふことは出來ない。眞實人を救ふと云ふのは、精神を以て精神を救ふものである、



信仰の力を以て人を救ふものであるから、自分が本當の信仰に入らぬ限りには、人を救ふことは断じて出来ない、故にその本當の悦びが、始終現はれて居りさへすれば、その悦びの力から進んで徳を産み出して来るのである。

七 慈愛の心情

その徳はいろ／＼現はれて来るが、どう云ふものが一番に現はれて来るかと云へば、優しい心が最初であります。吾々が信ずるお釋迦様は慈悲の結晶である、日蓮聖人も「慈悲すぐれたる事は、恐れをも懐きぬべし」と云ひ「日蓮が慈悲廣大ならば」と言はれた、吾が頂く祖師日蓮聖人も慈悲の結晶である、お釋迦様は勿論「毎に自らはの念を作す、何を以てか」と云ふ慈悲の結晶である、この釋尊を頂き日蓮聖人を頂く法華行者に、直ちに起るものは慈悲の精神である、その慈悲の精神が起つて居るのが、即ち御利益である。下等な人間は、何か人から貰ふことを以て、御利益と思つて居るけれども、乞食になつては御利益ではない、人に物を與へると云ふこの慈悲を以て、

世に立つことを得ば、本當の御利益である、動もすれば下等な欲望に走つて、罪惡の淵に陥るべき人の世に、清き精神に立つて生活を行はんが爲に、生きて居ると云ふ程、大なる利益は無いのであります。然るに御利益とし云へば手を出して、乞食が椀の中に残り物を貰ふやうに、病氣の時には癒して呉れ、貧乏だから金を呉れ、それでなければ法華の御利益でないと思つて、自ら佛性を有ち、立派な徳を行ふべき人が、それを忘れて乞食に墮落してしまふ事を以て、御利益とするに云ふのは、實に愚かな話である。今日立派な身分の人に「なあた兎に角一遍乞食の風になつて、一文下さい旦那様と云ふやうに、椀を持つて來なさい、飯を上げるから」と言つたら、その人が悦ぶかどうか、「馬鹿な事を言へ、百萬圓呉れても御免蒙む」と云ふに違ひない。所が今の法華行者と云ふ者は、立派な佛性を有つた人をして、やつぱり乞食たらしめて、椀を持つて残り物を貰へと云ふやうな、教化をして居るものである。假令自分が如何に貧乏であらうとも、無學であらうとも、法華を信じた以上は、日蓮聖人の弟子であり、



お釋迦様の教を奉じたるものであるから、一分たりとも慈愛の精神を以て立たぬと云ふことは無い、是が第一の考であります。

八 慰藉の實感

又さうなればその慈悲の中に、慰めと云ふものがある、親切を志して行く程愉快なことはない、又親切を以て起つ程、己れをして愉快ならしむるものは無いのであります、故にお經には第一に優しい精神が起つて来る、従つて残忍と云ふか、殺伐と云ふか、荒くれた無茶な精神が無くなると教へてある。法華を信する者がやけ糞で、唯だドンドコやつて石炭箱叩いて人の頭を張り倒し、仕掛けんでも宜い喧嘩を吹っ掛ける

九 正義の勇氣

と云ふのは、本當の信心の無い者で偽信者である。本當の信者であつたならば、優しくなつて来るから、殺伐の精神と云ふものは無くなる、無闇に人の頭を張り倒したり、喧嘩すると云ふことは法華行者でない。併し勇

氣と云ふものは、それと違ふ、殺伐と云つて無慈悲な事をしたり、残忍な事をするのと、勇氣と云ふものとはまるで違ふのである、勇氣と云ふものゝ眞に衰へべき所は、何處に在るかと云へば、

義を見てせざるは勇無きなり。

と云ふやうに、正義——正しい道を履んで行くと云ふ觀念と同時に、勇氣は現はれて來なければならぬ。泥棒するのに元氣が好いと云ふことは勇氣ではない、貴様今夜彼處の家へ仕事に行け「何處へ火を附けろ」……それは元氣が好いのではない、亂暴である、善を爲す時に於て、初めて勇氣と云ふものは賞讃すべきものである、惡を爲すに於て、勇氣が無ければならぬと云ふやうなことは、最も惡むべきものである、勇氣を賞揚するのは善を前提として居るものである、善い事を離れての勇氣と云ふものは、決して衰へべきものでない、喧嘩するのに勇氣があるとか、泥棒するのに勇氣があるとか、そんな事はやはり残忍酷薄の性である、勇氣の稱揚すべきは、先づ其處に義を



見て進むと云ふことであります。

一〇 法華行者の訓練

そこで法華行者は訓練されなければならぬ、野生的のものであつてはならぬ、歡喜の精神より徳を積み、それには優しい精神になつて、殺伐なる精神が無くなる、さうしてその上から義を見て進む、眞の勇氣と云ふものが現はれて来る。従つて眞の勇氣と云ふものが十分働く時分には、しみつたれの考、詰り執著と云ふものが無くならなければ、勇氣と云ふものは働けない、即ち「生を捨て、義を取るものなり」と云ふことがある、必ずや勇氣のことを爲す時には、矛盾が起る、この勇氣を以て進む時には、斯う云ふ不利があるが、斯う云ふ事をしなければならぬと云ふ、衝突が其處に起るものである。

一一 割愛の決心

その場合に勇氣を完うするには、詰らぬことに引掛つて居るのを、捨てなければい

かぬ、詰らぬ事に拘泥して居るが爲に勇氣も起らず、苦勞が多いのであるから、思ひ切る、打切ると云ふことが無ければならぬ。それを法華を信する者が、何時までも詰らぬ事に拘泥して、何もかも捨てられないと云ふことでは駄目であります、能く打切ることが大事である、物の輕重本末を考へて、どうしても此の事をやらうと思つて居る事でも、更に大きな事の爲には、その事を捨て、少しも悔む所無く、その大きな目的に向つて、進んで行かなければならぬのである、況んやそれが詰らぬ事であるならば、そんなものと思ひ切るのは勇ましくやらなければならぬ。それを日蓮聖人は非常に能く仰せられて居るのであつて、誰でもそれは平和な生活とか、女房と酒打飲んで暮らしたいと云ふ事は思ふけれども、君國の爲には命を捨て、進まなければならぬことがある、法の爲には生きながら別れなければならぬ事もある、或る場合には人生の欲望を犠牲にして、道の爲め國の爲めに進まなければならぬから、それは法華行者は豫め覺悟して置くべきである。



一二 高潔なる觀念

斯う云ふ高潔な道德の觀念を教へずして、日蓮主義が唯だ御祈禱すれば病氣が癒る、貧乏人が金持になると云つて、崇高なる觀念を教へない宗教であるならば、逆も將來發展し得べきものでないのである。何時までもそんな卑しい事はかりやつて居つては、いけないのであるから、この勇氣を完うする爲には、犠牲の精神を以て或るものは思切つて振り捨てる、それは日蓮聖人がその模範をお示しなすつて居るのであります。思ひ切らぬから、行かうか、行くまいかと云ふ所に心配がある、やると覺悟さへすれば、物は一方に極るのである、今軍隊の動員令が下つて、行かなければ牢に打込まれる、或は殺される、行けば女房と別れなければならぬと云ふ時に、進んで行けば愛しい女房と別れねばならぬ、退いて逃げれば牢に打込まれる、どつちにしようか、行かうか行くまいか、何日考へても、進めば女房と別れねばならぬ、さう云ふ時に決心をして、「是は國民の本分を完うしなければならぬ、それは女房と朝晩顔を見て居りたい

けれども、君國の大事に臨んでは、女々しい考を起すべきでない」と決心して、「女房、お前も勇ましく俺の首途を送つて呉れ」と云ふやうに、覺悟を極めさへすれば、案じるより産むは易いで、女房も「あなたがさう云ふ立派なお考ならば、妾は何時まででも待ちします、どうぞ立派なお功績をなさいますやうに」と云ふやうな譯で、女に勵まされて悦んで出征するやうになる。その決心が日蓮主義を信じた者は、はつきりと外の者より、色濃く現はれて來ない限りには、法華の利益を受けた人とは言へない、さう云ふ道德的の活躍する所が法華の御利益であつて、その通り日蓮聖人及び弟子信者は皆やつて居る。

一三 功業の創建

そこでさう云ふやうな思ひ切つた精神が、現はれて來る結果は、其處に非常に立派な手柄を現はし、功業を打立てることが出来る、國の爲にも人の爲にも法の爲にも、世を益し人を益する所の事業を打立てることが出来る、その事業を爲すために力を現



はして来る、勇氣を現はして来ると云ふことが、法華行者の利益でありませ、即ち奮闘生活をする所に、法華經の御利益が現はれて来る。その職業は各々分擔があつて違ふけれども、軍人は軍人として、日蓮主義を信じない以前よりは、信じたが爲に一層軍務に忠實であり、軍人の精神を發揮すると云ふことに現はれて来る、實業家は従来よりも一層その商賣に勉勵して、商業上に就て特色を現はすと云ふやうになるのである、女房なら女房は、今更で法華を信ぜぬ前は朝寝であつたが、今度は朝早く起きて家の内外を綺麗にし、イソ／＼して今までのやうに詰らぬ事を、心配して青い顔をしなないで、何時もニコ／＼して活き／＼した快活な精神を以て、夫を迎へて呉れるやうになる、その活動振りに現はれて来るのが御利益である。

一四 愛國的功業

さうしてその事業と云ふものは、立派なものを段々に考へて行くやうになつて、どう云ふ所まで行くかと云へば、日蓮主義は普通の宗教と違つて、唯だ個人の幸福ばかりに止まらなない、どうしても國家を思ふ所の精神に進んで行くのである。どうしても日蓮聖人を信する以上は、日蓮聖人は立正安國の教を遺されたものであるが故に、法華行者にして國を思ふ精神無くして、唯だ狐憑きを癒すと云ふやうな事はかり言つて、日蓮聖人の偉大なる愛國的教化と云ふものを、受けて居らなければ駄目である、南無妙法蓮華經を唱へる以上は、他の宗教より色濃く忠臣愛國の觀念が發達してこそ、日蓮が弟子檀那と言はれるのである。さうして其處に勇ましき、國の爲に功業を打立てる働きをする、それは今言ふ通り各々職業を通して、労働者は労働者の模範となる――

今日は労働者の中にもいろ／＼な問題が起るが日蓮主義を信じて居る労働者は違ふぞ、普通の労働者は何をやらうとも、南無妙法蓮華經と唱へる者だけは、詰らぬ事はせぬぞと云ふ、その色彩を濃く現はしたならば、如何に愉快でありませうか、詰らぬ事をしないで、自分の心得一つで圓滿に事はやつて行ける、他の労働者が同盟罷工の相談でもして、大舉して示威運動に繰出すと云ふ時に、日蓮主義を信する労働者



のみは、獨りそれを離れて、その時こそ萬燈でも點けて、聲朗らかに南無妙法蓮華經を唱へて、混雜せる紛争の中に交はらぬと云ふことを示せば、其處に日蓮主義が輝くのである、唯だ譯もなく法華行者の御利益を、小さな事にばかり考へて居る間は駄目でありませぬ。さうしてその道德性が完成されて、その人その人に就て、缺けた所が段段減つて来る、その意味に於て法華經は、活きた力を現はすものである、何とも言へない所の活力を有して居る、どの宗教でも少つとはさう云ふ事を言ふけれども、外ものは效目が鈍い、法華經と云ひ日蓮主義と云ふものは、人に歡喜を與へることも強く現はれるものである、觀音様を信じて難有い〜と云ふけれども、日蓮主義の南無妙法蓮華經を唱へる方の難有いと云ふ精神は、觀音様を信じて難有いと云ふのがせんべい一枚位ならば、此方は牡丹餅のやうな大きなものだ。國家を思ふと云ふ精神にしても、人皆無い譯ではないが、それは淨土宗で法然上人あたりが、國は大事だ南無妙法蓮華經と云ふ所、愛國の精神が燃える

と云ふやうに、色濃く現はれるのであります。それが自分の精神に活躍せぬ時には、未だ自分には、法華經の御利益を戴いて居らない者であると考へて行くべきである。

一五 人格の改造

元來宗教が利益すると云ふのは、人間を改造するのである、改造と云ふのは、生れ變ると云ふ意味である。彼の鶯掘摩羅と云ふ悪人は、百人切りをして居つたが、お釋迦様に濟度せられて、生れ變つて善人になつた、その生れ變ると云ふ事が、非常に大事なのであります。精神的に再び生きる意味である、親から産んで貰つたこの儘の人間でなくして、日蓮聖人の教を以て改善して貰つた新しい人である、親から産んで貰つたこの眼は、品物を見るだけで、心眼と云ふ心の眼が開けて居らぬから、法華經の教に依り日蓮聖人の教に依つて、所謂開目鈔に依つて精神の目を開くのである、さうしてそれから一切の物事を見て行く時には、歡喜と道德の行爲になつて現はれて行く、それが法華經の利益の一番大きなものである。故に四條金吾に對して、日蓮聖



人の言はれたのは、「宮仕へを以て法華經と思召せ」——即ち主人に仕へて行く實際生活の其處に、活きたる法華經の働きと云ふものはあるのである。

主の御爲にも佛法の御爲にも、世間の心根もよかりけり——と、鎌倉の人々の口に謠はれ給へ。

法華行者は主人の爲に忠節を盡すに於ても手本の色を現はす、法華經を信ずる宗教の信仰に於ても特色を現はす、世間の心根と云ふ一般道徳の觀念に於ても特色を現はして、成程四條金吾は忠節の上からも、信仰の上からも、一般の道徳性の上からも、非常にえらい者だと云ふ褒め言葉を、鎌倉の人々の口に謠はれるやうに心掛けて行れ、それが日蓮主義を奉ずる者の心得だと仰せられた。何でも手本になる——是は手本になると云ふと、又難かしく考へる人があるけれども、今言ふ通り労働者の手本になるには、彼等が詰らぬ騒ぎをする時分に騒ぎさへしなければ、直ぐ手本になれる、この手本になると云ふことは、心懸けに依ては随分面白いものであると思ふ、能くお話しする

ことであるが、小國村の村長になつた人は、何か功業を打樹てやうと云ふので、拍子木一挺拵へて朝早く人を起して廻つて、非常な治績を擧げたことがある、外の事は自分は何にも出来ぬからと云つて、朝早く拍子木を叩いて村人を起して廻つて、さうして非常な勤儉力行の人とした爲に、模範村を造ることが出来た。何でも志さへあれば出来るものである、學問が無いから出来ないの、金が無いから出来ないのと、云ふやうな事を言うて居るのは、志が足らないのだ、能はざるにあらず、爲さざるなり、何でも何處からでも出来るものである、それが大事である。國を思ふならば、己れの方を守つて進んで行けば、必ずや立派な愛國の美點を發揮することが出来る、法を思ふ精神ならば、私は始終言ふ、如何に無學な坊さんで、お自我偶一卷しか讀めんでも、自分に誠心さへあれば、立派な感化を與へることが出来る、自分は學問もないし智慧も無い、辯論も立たぬから説教も出来ない、たつたお經一つ覺えたと云ふ坊さんが、全精神を以て「自我得佛來、所經諸劫數」と讀んで居る、信者が來ても檀那が來ても



「柄は説法は出来ぬから、その代りにお自我偈を讀む、聽いて居つて呉れ」と云つて、一心に讀誦する時には、一種特別の聲と力が現はれて来る。「彼の坊さんにお經を讀んで貰うと、如何にも有難い」と云ふことになつて、説法も理窟も聽かないでも、そのお經の熱誠と云ふ事に依つて、ビタリ／＼と大勢の人が感化される。何でもやれる、やれぬと云ふのは志が足らぬのだ、日蓮主義を以て感化したる者は、如何に力の無いやうな者でも、皆な活躍をして一種の特別な力を發揮し來ると云ふことに於て、茲に日蓮主義の御利益があると私は思ふ。

一六 正信と健康

先づ現在の事に就ては、さう云ふやうな精神が本になれば、自ら長生きすることに  
もなつて來るのであります、自分が何時も歡喜の精神に充ちて、一つの理想を以て闘つて行けば、精神に激みがないから、身體が健康にもなり、長生きすると云ふことは自然の結果として現はれて來る、又長生しないでも悔む所もないが、さう云ふ理想を

有つて、自然に長生すると云ふやうな結果が來るのは、結構な事であるから、それを態と避けるには及ばぬ、それを理想を擲つて、何も彼も抛つて、唯だ生きたい／＼と云ふやうな、迷の心を助長する宗教ならば、そんな宗教は邪教である。人間は朝に道を聞いて夕に死すとも可なり——是が人間の本領である、徒に醉生夢死するならば、百年千年生くるとも、何の益かあらんと云ふ事を考へなければならぬ、そんなしみつたれた了見で、唯だ譯もなく汚れた精神を以て、一日でも生き永らへたいと云ふやうな、卑しき迷の心を助長することに、日蓮主義が手傳ふならば、日蓮主義は豚の生活に賛成するものである、さうでなしに、生き／＼したる精神を以て進むが故に、自然に其處に達者になつて來る。現代人は餘りに劣等である、深呼吸なら深呼吸をやるのは何の爲だ、長生きするんだ、唯だ長生きする爲に蛙の真似をする、理想を以て進むならば、永い短いは言ふ必要はない、併しながら勇しき精神を以て奮闘するならば、却つて長生すると言ひ得られるのである。それは新田義貞が言つたやうに「我家の戰



法は他にあらず、進む者必ずしも死せず、退く者必ずしも生きず、運を天に任せて、感ふこと勿れ」と、是が良いのである、日蓮主義を信じたからと云つても、必ずしも百まで生きると云ふ譯のものではない、けれども「進む者必ずしも死せず」——戦に行くなれば、真先に進んだ者が屹度弾丸に中るとは極らない、怖い／＼と云つて後を向いて逃出す時に、背後から弾丸が飛んで来ないとも限らない「退く者必ずしも生きず」である、一旦戦場に出たならば、死ぬる生きると云ふことは問題でない、卑怯未練な振舞をして耻を後世に曝さないやうに、背中に弾丸を受けるやうな事のないやうに、運を天に任せて奮闘しろ、その位の事が法華の行者に分らぬやうでは駄目である、人間と云ふ者は下らぬ事を考へて居つたならば、益々下らぬ考になつてしまつて、しまひには溝の中に頭を突込んで生きて居りたいと云ふやうになる。けれども溝の側の石崖は何時崩れるか分らぬ、大きな石がガラ／＼と落ちて来れば、ギューツと潰されて死んでしまふぢやないか、實に淺ましき結果になる、勇ましくやつたからと云

つて、決して先きに死ぬ譯でもないから、それを考へて、さう云ふ、人の中で話の出来ないやうなケチな事を思はないやうにしなければならぬ、法華を信心して居るから長生ですとか、金がこんなに儲かりましたナンと言ふ：：實に汗がダラ／＼出るぢやないか、寄る者も来る者も、法華の信者と云へば大きな數珠を掛けて、法華を信心すれば長生きしますヨと云ふやうな事はかり言つて、實に劣等の事だけしか言はぬ、少し修養のある人に聞かれたならば、實に慚愧に堪へぬことである、何故にこの偉大なる宗教を、斯の如く劣等なる感化に墮落せしめたか、誰の責任であるか、教は今尙ほ儼然として存して居る、日蓮聖人は左様な事は一つも仰しやらない、寧ろその反對に、天も捨てたまへ、諸難にも遇へ、身命を期とせん。

と言はれた、諸天善神がお見捨てになつても構ひませぬ、正しき道を踏んで行けば、諸天善神はお守りなさると云ふ事ではあるけれども、諸天善神が若し居睡りなまつて、正義を履む日蓮が一類をお守りなさらぬからと云つて、「何故居睡りして居るか」と云



つて喧嘩には行かない、縦し諸天はお守りなさらなくとも、現世は安穩ならずとも、正義を履んで進む日蓮の人類は少しも悔ひ所は無い、疑の心無くば自然に佛界に至るべし、必ず自分は向上を遂げると云ふ信念を以て進む、さう云ふ立派な御利益が澤山あるのだから、そんなケチな事ばかり言はないで、本當にやつて行けば、有ゆる御利益が伴うて来る、さう云ふやうに説くのが、正しい宗教と云ふものである。いやな事ばかり先きに並べて、考ある者から嘲けられるやうな事を言ふのが、迷信と云ふものである、如何に商賈が錢を儲ける爲だと云つて、客が来て居るのに、客の懐中へ手を入れて、あなたの錢を取るのですヨ、商賈は客の錢を捲き上げることですヨ、そんなにせんでも正しい商賈をすれば必ず利益があるものである。

一七 歿後の得益

そこで現在に於ては、さう云ふやうな高い精神に生きて行く事、さうして未來にはどう云ふ生活に移るかと云へば、是は申す迄もなく吾等が本心に有つて居る所の佛性と云ひますか、限りなき尊いものがある、その命に就て言へば、この現在の人間は五十年七十年の壽命だけれども、この限りある壽命に現はれて居る人の生命は、眞實でない、この肉體と結びついて居るが故に五十年の生命と思ふけれども、肉體を離せば吾々の生命と云ふものは、無限の生命に通つて居るものである。慈悲親切も今日は洵に微かにしか現はれないけれども、佛性が開かれれば大慈大悲となつて、一切衆生を子の如くに愛し、一切衆生の苦みを救ふが爲に、活動する精神となつて現はれる、その無限の慈悲を有つて居るのである、非常な歡喜も有つて居るし、何も彼も申分の無い圓滿珠の如きものを有つて居るのを、佛性と云ふ、人はみな佛性の偉大なるものを有つて居る、それが吾々の全體である。藏の寶とか株券と云ふものは、どうしてもこの世に置いて行かなければならぬ財産だ、自己と離れない全財産と云ふものは、我が生命の中に有つて居る所の限りなき能力で、智慧と云ひ慈悲と云ひ活動と云ふものであります。然るにこの方の寶を忘れて、唯だ形に現はれて居るもののみを以て、自分



の所有財産と思つて、心の益々やつれて行くと思ふのが、現代生活の有様であるが、それでは駄目である、人間は生きて居る間は現在の爲にいろ／＼働けども、最後はこの佛性を顯はすと云ふ、一つの目的に生きねばならぬ、限りなき生命であつて而してその質は完全と云ふ、實に尊いものが自己であります。それは法華を信じて居る者は前きに申したやうな歡喜の中から、徳を積み、信心を以て生活して行くから、その菩薩行を爲したる結果として佛性が磨かれて、今度成佛をすることになるのであります。

一八 刹那の成佛

その成佛は臨終の時を期してであるから、人生の息を引取る刹那、是は最も早い意味に説明されて居る、死んでからソロ／＼モウ一遍淺草や上野の山を見物して、それから佛になると云ふのでない、息を引取れば直ぐである、人間の肉體から生命が去ると云ふのは、何時であるか分らぬが、去れば今度向上する時分には、刹那の成道と

説くのである、それが日蓮聖人の力を入れて示された所であり、須臾の程に飛來つて』と云つたり『刹那』と云つたりしてある、是は最も短い意味に考へなければならぬ、『刹那』と云ふのは、一彈指六十分の一と云つて、ハツと呼吸をするそれを六十に割つた、その一つの速さである、一秒を六十に割つたのであるから非常に速い、ハツと言ふ間ではいけない、何とも言ひやうがないから刹那と云ふ、その有様は八歳の龍女が成佛する時に示して居る、法華經の提婆品をお讀みになれば分りますが、龍女が珠をお釋迦様に奉つた、お釋迦様がそれをお受取になるのが非常に速かつたので、龍女が珠を持つて行つたかと思つと、お釋迦様がハツとお受取りになつた、それがお釋迦様の弟子達の目に見えなかつた、その時に龍女が言つて居る、『智積菩薩、尊者舍利弗、あなたは神通の力を有つて居るが、今世尊の珠をお受取りになつたのが、疾かつたか遅かつたかどうか、彼等が答へて言ふには、『洵に疾かつた、眼に見えぬ位であつた、』我が成佛を觀よ、モツと速かだから』。此處は非常に愉快な所で、女人成



佛の最も大切な意味を現はして居るが、最初は女人の成佛に非常に反対した、智積や舍利弗は、女人は佛になることは出来ぬと云つて居る時に、龍女が珠をお釋迦様に捧げて「是が疾いか遅いか」と云つて聞いたので「甚だ疾し」と答へた時に、女が言うて居る。

女の言く、汝の神力を以て我が成佛を觀よ、復此よりも速かならん。龍女は忽然の間に、云々

と云ふやうに「忽然」と云つたり、「須臾」と云つたり、「甚だ疾し」と云つたり、「速かならん」と云つたり、「速い」と云ふことが澤山言うてあるのは大事なことである。息引取れば瞬間に、バツと今言ふ所の佛性を顯はして佛になると云ふことが、法華經の御利益であります。

一九 順次成佛の勝益

その時には間諛つきがあつてはならない、幾ら女房が泣いて居らうが、子供が慕つ

て居らうが、バツと一遍に佛になつて、スツカリ完成してから今度戻つて来て「泣くなく」と云つても間に合ふ。日蓮聖人は之を、

靈山へ参りて還つて導けかし。

と仰せられた、歸つて来てからで宜いので、行く時に間諛つてはいけない、其處は平生から始終考へて居らねばならぬ。成佛すると云ふことも、今の法華宗では甚だ不透明であつて、法華信心すれば即身成佛だと云つて居るけれども、そんなのろ間な事ではないかぬ、即身成佛して居る者が、腹が減つて喧嘩したりしては駄目である、即身成佛した者が酒の一合や二合でグデン／＼になつて、酔ばらひの佛などが出来ては困る、それは佛性が自分に在ると云ふことは事實であるし、それが顯はれると云ふことは極つて居るけれども、今の法華行者は先づ三日月になれば土等だけれども、二日月位の所で、將に光を發せんとして居るけれども、未だ光を發し得ないものである、それを日蓮聖人は「理即到に秀でて名字に足らず」と言つた、理即到の行者は晦日の月であ



る、名字の行者は三日月まで行くけれども、名字の行者に足らない、二日目のお月様位のものである、それが成佛と云ふに至つて、十五夜の満月の如く光を放つのである。元來日本人には極劣等の思想があつて、總てのものを現在に於てのみ解釋せんとする、生命の問題でも死んだ先きを言へば笑ふ者がある、死んだ先きの事を論じない位ならば、生命の問題を言ふ必要はない、生きて居る間生きて居ると云ふだけで、過去に遡り未來に涉つて論じなければ、生命の問題はいらぬ、然るに生命の問題を論ずるのに、未來に亘つて論ずるのを嫌がつたり、笑つたをするのは、洵にその意味が分らないではないか。未來と云へば遠いやうだけれども、今此處にウンと呼吸を止めれば、その瞬間が未來である。

後の世と聞けば遠きに似たれども

知らずやけふもその日なるらん

と云ふが如く、後の世と云うと遠いやうだけれども、明日でなくして、今日が後の世

であるかも知れぬのが人生である、であるから生命の永存と云ふことは、遠い問題ではない、明日の問題ではない、今日がその問題の大切なる日であるかも知れない。そこでその生命が続いて行くと云ふことに依つて、現はれて行くのであるから、之を順次成佛と云ふ、この言葉を能く知つて居らなければならぬ、順次と云ふのは直ぐ次に生れる、今の人間から直ぐ次に生れ變る時に、何處にも寄り道しない、西方阿彌陀の世界へ行つて蓮葉の上に乗つたり、それから觀音様が來て蓮葉を開いて呉れて、モシ／＼と云つて電話を掛けたりしない、パイツと行くこの直線の所を尊ぶ、そこが法華經の大利益である、少しでも蟠りがあつては不安の念が襲うていかぬ、忽然の間にパイツと行つてしまふ、その勢を示して居るものが日蓮聖人の順次成佛である。是は私が宜い加減の事を言ふと思はれるといけないから、少し御遺文に依つて證明して置かう、私は少しも宜い加減の事は言はない、何もかも皆な御妙判にあるけれども、是は大事な所であるから特に御妙判を擧げやう、「十如是事」といふ御遺文に斯うあり



一生の内に限りたる事なれば、臨終の時に至つて、諸々の見えつる夢も覺めて、うつゝになりぬるが如く、只今までみつる所の生死妄想の邪思、ひがめの理はあつと形もなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界を見れば、皆寂光の極樂にて、日頃賤と思ひし我が此身が、三身即一の本覺の如來にてあるべき也。

臨終の時に覺を開いて振返つて見れば、今まで詰らない人間と思つたのが本覺の如來である、法界を見ればみな寂光の極樂淨土である、それを法華經に「我此土安穩」と説かれた、西へ行くとも天へ行くとも言はない、そんな事は餘計な事だ、直にこの處に於て、日頃賤しと思ひし我が身は三身即一の如來である、穢土と思ひしこの世界は常樂の淨土であると云ふことが、即座に明かになる、それは「臨終の時に至つて」と附いて居るのが、順次成佛である。又その他の御書に於ても、順次成佛の事は澤山言うてある、是は最蓮房御返事でありすが、

成佛の期至つて順次に得脱せしむべき故にや云々。順次に三佛座を並べ、常寂光土に詣でて釋迦多寶の御寶前に於て云々と云ふやうに、「順次々々」と云つてある、其處が一番大事のところである。

二〇 即身成佛の誤解

即身成佛々々々と豪さうに言ふのは、法華學者の出來損ひである、それは日蓮聖人も書いて居られる。

傳教大師は分段の身を捨て、も捨てずしても、法華經の意にては即身成佛なり。この身を捨て、も捨てないでも、即身成佛と云へる、捨てても即身成佛と言へる。それはどう云ふことかと云へば、自分の本身と云ふものはこの身ぢやない、十界具足の妙體と云ふものが本當の自己で、人間は一時の假のものだ、本當の色身は、この人間が生れ代つても、變らないものがある、だから傳教大師は、この身を捨て、も即身成佛であると言はれた。



慈覺大師の義は、分段の身を捨つれば、即身成佛にあらすと思はれたるか。

この身生きて居るこの儘が、佛になつて行かなければ、即身成佛でないやうに、慈覺大師は思はれた。

敢て即身成佛の義を知らざる人々なり。

この身この儘行かなければならぬと思ふのは、即身成佛と云ふ本義を、知らないと思はれて居る、斯の如き聖訓は澤山ある。佛になつてから夫婦喧嘩をしたり、離縁をしたりしては、おかしなものである。現在生活に於ては、信仰に生くる時は、尊い光を現はすけれども、信仰を忘れれば直ぐ舊の人に歸る、淺ましき所を上つたり下りたりして居る、即ち晝夜に往復と云つて、善い所へ行つたり又戻つて來たり、洵に怪し氣な生活を營んで居るものである。信心決定すれば怪しい事は無いけれども、その信心の手綱の弛んだ時は、元の默阿彌である、即身成佛ではない、生きながら地獄や餓鬼の方へ直ぐ行く、實に殆い哉炭々乎たりである、唯だ精神の上に信仰が活きくして居

る時こそ、尊い生活に移つて居るけれども、それが鈍つた時は又元の豚に歸ると云つて、日に三度我が身を省みて、節々に信仰を勵むと云ふ所に、日蓮主義は生きて居るのである。煽てまくつて、唯だ一遍即身成佛してしまつたらそれで宜いと云ふのは、是は邪説である、そこは大事なこと、非常な間違になつて來る。お釋迦様はその事を最もやかましく言うて居られる、涅槃經には井戸の水に譬へられて居る、それは何處でも掘りさへすれば水がある、人の精神にはみな佛性があるから、それを開きさへすれば立派な佛になれるけれども、水があるからと云つて、井戸を掘らなかつたならば、水は出ない、井戸を掘つても釣瓶が無く、綱が無く、且つ釣瓶や綱があつても、水を汲上げない限りに於ては、その水は何の働きも爲さない、水ある事を知らぬ者も詰らぬけれども、水ある事を知つた者には、釣瓶を拵へることを教へなければならぬ、釣瓶を知つた者には、それを汲ひことを教へなければならぬと云ふことを、お釋迦様が説いて居られる、日蓮主義は日々釣瓶で水を汲んで、佛性を働かして、菩薩の行を



實現して行く教であつて、ぼんやりして居る理窟を以て、満足して居る宗教ではないのである。實は斯様な譯の分らぬ學者が段々あるけれども、それは學問が不徹底であつたと云ふことを、私は責任を帯びて斷言して置く、學者らしい顔はして居るが、それは學問が出来て居らぬ者だと云ふことを、今茲に斷言して置く、今までにさう云ふ事を言つた學者らしいやうな坊さんも段々あるけれども、それは學問が出来て居らなかつた人である、本當の日蓮主義と云ふものは、そんな生煮であつたり、煽てたりするものでない、だから日蓮聖人も言つて居られる、日蓮聖人自らの覺悟を以ても、開目鈔に言つて居られる通り、後生には大樂をうくべければ大いに悦ばし」と云ふやうに、希望を前途に置いてある。又顯佛未來記を見てもさうである、聖人は愈々佐渡が島に於て、今度命が無くなるかも知れぬと云ふ時にも、その悦びはやはり現はれて居る。

幸なる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ、悦ばしい哉、未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ。

今度佐渡が島に於て殺されたならば、平生お慕ひ申して居るお釋迦様の側に行くことが出来る」と云つて、聖人は悦んだのである、即ち前途の希望を示して居る、龍の口の時にもさうである。

くさき首を法華經に捧げて、金色の如來となるは、砂を以て黄金に代ゆるが如し。と言つた、即身成佛して居る者が首斬られてしまつては、是は飛んだ事が出来ると云つて、弘法大師のやうに光を放つて、紫の雲に乗つて逃げると云ふやうな事はせぬ、弘法大師が面門光を放つて、即身成佛したと云ふやうなのは、だまし物である、又さう云ふ事をやつたからと云つても、何もえらいものぢやない、果してやつたら惡魔の作業であると云ふことが、經文に説いてある、人間が口から光を放つて、弘法大師が佛になつて見せたと云ふやうな事は、それは駄目である。日蓮聖人の臭き首を法華經に捧げて云云、是が本當の宗教である、活き／＼した本當の力を産出す所の偽りなき



宗教を採らなければならぬ。

であるから生きて居る間は、前に言ふ通り歡喜を有ち、その悦びの中に徳を積んで、功業を打樹てて行く所の利益があり、命を終れば、一刹那の間に佛性を顯はして、絶對の佛になつて行くと云ふ、順次の成佛を採るものであります。故に如説修行鈔には彼の有名な、

唱へて唱へ死に死するならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來りて、手を取り肩に引懸けて、靈山へはしり給はば云々。法華經の行者が唱へて唱へ死に死する程に、一心に信仰を持続したならば、直ぐお釋迦様が、お迎ひに來て下さると云ふことになつて居る、刹那の際に至るまでの信仰と云ふものは、何處までも續けて行かなければならぬものである。それは本當の宗教味を味はないから、唯だ信心した時に、佛になつてしまつて居ると云ふやうな事で、爛てまゝられて、満足して踊つて居る奴は、實に瓢箪ばかりが浮き物かと云ふ話で、淺

ましい者である、眞に活ける宗教心を有つて居れば、そんな輕薄なものでない、如何に信仰を有つて居つても一步誤れば、海に淺ましき生活に陥るものであると云ふ、警戒の手綱と云ふものは、少しも弛めることが出來ない、であるから日蓮聖人も始終言はれて居る。

濁水に月のうつれるが如し、糞囊に金を包めるなるべし。

と云ひ、或は

理即到て秀でて名字に足らず。

と云ふのは、實に今言ふ意味を現はして居る、中々危い所で、油斷したならば直ぐ墮落する。であるから當體義鈔と云ふ御書があつて、「我等の當體即是れ蓮華佛なり」と云ふやうな所でも、「日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり」と云つて居られるので、日蓮が弟子檀那と云ふことは、非常に尊い意味に於て言うてある。今の信者見たやうな凡くらは、日蓮の弟子檀那でも何でも無い、酔ばらいただから、それは逆も駄目



だ、「日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是れなり」と云ふ一方に、この身この儘に、當體蓮華を證得する者ありやと云ふ時に、「阿鼻地獄の當體を證得する人之れ多しと雖も、佛の蓮華を證得する人之れ無し」と言つてある。十界具足の妙體であるから、地獄の方へ縁を結んで、赤鬼青鬼に責められて、苦しむべき人が一パイあると云ふ、其處に本當の宗教がある。天台大師が一念三千を説いても、やはりさうである。今一念何處に行くや——一念三千であるから、一念清淨の心を懷けば、佛の精神も起り、菩薩の精神も起り、非常に立派であるけれども、一念迷つた精神が起つたならば、直ぐ地獄の精神が現はれて来る、餓鬼の精神が現はれて来る、善い所へ行けば、一念に三千を具して、直ぐ佛様になれると云ふけれども、即今唯今自分の心は、十界の中何れに屬するやと云つた時に、餓鬼に屬し地獄に屬し、畜生に屬する精神が多いから、實に背中に汗を流すと言つて居る。一念三千の法門でも、「法華を信心したら一念三千の當體蓮華佛だ」。そんな鈍間なことでは駄目だ、宗教と云ふものは、さう云ふ不謹

慎な、だらしの無いものではない。日蓮聖人はど立派な精神を有ち、立派な活動を爲しても、尙ほ且つ「日蓮は理即到秀でて名字に足らず」と言ふ、日蓮の言ふ事は間違ないけれども、日蓮の身は毒蛇の如し、唯だ口に言ふ事は法華經の金句なるが故に、毒蛇の珠を含むが如しと言つて居る、この位自分の身には、反省力を有たなければならぬ。併しへこたれはいけない、初めからへこたれて、自分は罪が深いから、地獄に行くに定つて居ると云ふのはいけない、へこたれがいけず、慢心がいけない、吾々に佛性ありと云ふ希望と、油断すれば駄目だと云ふ所の警戒力を以て、進んで行かなければならぬ、其處が如何にも尊い御利益で、順次成佛と云ふことである。

二 女人成佛の勝利

モウ一つは前きに言つた女人成佛と云ふことが、法華經の利益として現はれて居る。是は言はずもがなだけれども、他、佛敎に於ては、女人の成佛と云ふことが、出来ないやうな議論があつて、眞言あたりでも女人禁制と云ふやうな風に、女人々と云つ



で、非常に別種の扱ひをして来た。法華經はそれを破つたので、女人成佛を許すのは、法華經の特色であるから、日蓮聖人はその事を仰しやつて居る、澤山御遺文にはあるが、殊に『千日尼御前御返事』には

此は一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成佛第一なりと、ことわらせ給ふにや。されば日本の一切の女人は、法華經より外の一切經には、女人成佛せずと嫌ふとも、法華經にだにも女人成佛ゆるされなば、なにか苦しかるべき。

他のお經に於ては、女人成佛の事が明かになつて居らない、全然無い譯ではあるまいけれども、宗旨として現はれた所には、女人成佛の義理がはつきりして居らない。日本坊さんは、女に對して悪口ばかり言つて居る、女の悪口ばかり言ふやうな坊主は碌な者でない、全くである、女人が憐れな者であるならば、悪口言つて濟むものぢやない、貧乏人の悪口ばかり言ふ、宗教家があつたとして御覽なさい、その宗教家と云ふものは詰らぬものである、若し眞に女人が憐れむべきならば、最も深き同情を以て

教導感化すべき努力を、モット親切に現はさなければならぬ。日蓮聖人は彼の剛勇果敢な活動の裏には、女性に對して、非常な同情の教訓が多いのであります、是非非常なえらい宗教家であると思ふ、日蓮聖人は、法華經が一切經の中の第一なのは、女人成佛がある所に於て、法華經は特に光を放つて居ると言つて居る。その女人成佛と云ふことは何も難かしい事は無い、形に於て男と女とは違つて居るけれども、心まで違つたものでないのである、女の方が罪が深いと云ふやうな事は、法華經に於ては少しも無い、男でも女より罪の深い者は澤山ある、何も違はない、殆んど一點も違はぬ譯であるが、併し體の組織が違ふから仕事は違ふ、一體仕事して汗掻くことは、男が引受けなければならぬ、優しい事は女が引受けなければならぬ、勤勉努力することは男子の仕事である、優しい美を以て世を調和するのは、女の仕事であるから、女が苦しい顔をしたり、嫌な事を言つたり、世の中の仲の好いのを悪くしたりしてはいけない、男が力が抜けてノラクラした時にも、女の慰めに依つて、又元氣を出して働くと云ふ



やうに、女は優しく世を調和し引立てるものである、さうすれば少しも間違はない、男もえらい、女もえらい、女は子を産むことに於て最もえらい、女が子を産んで呉れなかつたならば、人間の世界は一遍に絶滅してしまふ、女が子供を大きくする所の愛と云ふものは、非常にえらいものである、その證據には男親が一人残つて、女親が先きに死んだならば、その子供は大抵碌な者にならぬ、不良少年は大抵母を喪ひし子供である、母親が一人残れば、どうにか斯うにかその子供を大きくして、まさか泥棒にはしない、両親の愛と云ふものは、子に對して同じであるべきだけれども、私は本當に研究したならば、母親の方が、子を愛する精神は餘程深いと思ふ、男は宜い加減の事を言つて居るけれども、事實見て居ると、親父は酒くらつて寝てしまつて居るが、併し母親の方は中々子供の爲には苦勞して居る、であるからさう云ふ點から言へば、婦人の子供を大きくする所の働きと云ふものは、中々豪いものである。

二三 母の感化

又大抵の者は最も幼少の時代に感化を受けたものが、基本人格と云ふものになつて、學校の感化より、家庭に於て母親の躰と云ふものが、その人一代の運命を下するのであります、それは明治天皇の御製にも、

たらちねの庭の訓は狭けれど

ひろき世に立つ基とぞなる

と仰せられて居る通り、狭き家庭に於ける「悪い事をしてはいけませんよ」と云ふ母親の一言は、千卷の倫理の書物に優る力を有つて居る。故に婦人には非常な價値を認めなければならぬ、法華經が女人の成佛を許したと云ふことは、文明を作つて行く上に就て、非常に大切な意味をもつのであります。

二三 母の恩

又親孝行と云ふ方から考へても、女人の成佛が出来ないことになる、親を思ふ精神から如何なる人も満足を得られない、是は大事な問題である。人には誰でも母親が



ある、坊さんは男であつても、お母さんがある、日蓮聖人も、女人成佛の許されて居らぬ宗教であれば、母を救ふことが出来ないと言つて、非常にそれを言つて居る、法華經は女人成佛の教であるが故に、我が母を救ひ得ると云ふことを以て、非常にお悦びになつた。親鸞上人はその處をちよつと間違へて、母の事を思うて念佛は言はぬと云つて居る、それが善いのか知らんけれども、變な事だ、自分が救つて貰ふか貰はぬかの問題だから、母の事など考へて居る暇が無い、自分が食ふに困つて居るから、親など食はすことは出来ぬと云ふのか、いやな言ひ方をして居る、それをいろ／＼と辯護するやうな人もあつて、どうか斯うか豫審免訴位にはなるかも知れんけれども、あゝ云ふ事を宗教家は言ふものぢやない、親の爲には一遍も念佛申さず候……さう云ふことを言はないでも宜い、百遍でも千遍でも親の爲に言ふが宜い。日蓮聖人は到る處に母の恩を説かれて居る、是は非常に大事なことである、女人の立場は母の恩を説いて呉れる宗教でなければ駄目である、一生涯お母さんの恩が、重い／＼と云つて

説いて呉れれば、その息子が親を大事にする、子供が親を大事にしなかつたならば、母親は大失敗である、子供が「母親ナンぞどうでも宜い、腹ばかり物だ」ナンと言ひ出したらお仕舞だ、女の不幸は、子供が孝行であるかないかで分れる、日蓮聖人は、父母の恩は、今更申すべきにあらねども、母の恩殊に心肝に染みて尊く覚え候、空飛ぶ鳥の子を養ひ、地を走る獸の子に責めらるゝを見ては、魂も消えぬべく覚え候。

と仰しやつた、鳥や獸は母親だけで、父親は少しも關係しない、猫の父親と云ふものは、子は拵へるか知らんけれども、あとは知らん顔して居る、地を走る獸でも、みな母親が子を育てるのだから、母の恩が殊に大切である、是は事實であらうと思ふ。今日以後いろ／＼面倒な世の中に在つて、子供を大きくして行くと云ふことは、重大な事であるから、母親の恩の重い事を十分に説いて、何時までも親切な婦人を多くしなければいかぬ。西洋の婦人は子を大きくしない、面倒だから乳母を置いて牛乳でやつ



てしまふ。散歩に行くにも自分は亭主と手をつないで行く、子供は家に置いて行く、日本でも新しい女などと稱する者は、子供ナンか育てるのは御免蒙むると云つて、嫁に行く前から、出来た子供は牛乳で育てることを、條件としなければ結婚しない者もある、是はいかぬ、人生は唯だ算盤ばかり考へてはいかぬ、西洋では女が働いて、幾ら賃銀が取れてどうだと言ふけれども、さう下らぬ事ばかり、文明人は考へて居つてはいかぬ、男が働いて女は家に居つて綺麗にして居つて、生活の出来る程度に、文明人は作らなければならぬ、この頃も英吉利では女が彈丸を拵へて居るから、日本の女も鐵砲彈丸を拵へなければいかぬと云ふ議論があるが、戦争が男だけで足りなくて、女まで砲丸を拵へるやうな人生を作つては駄目だ、戦は今になつては止められまいけれども、眞に國を擧げて戦争にばかり没頭するに至つては、實に慨嘆すべきものである、戦争は男に限つて、擧丸ある者同志に限るやうに極めたが宜い。斯の如く女子の問題なども、法華經の主義は非常に宜しいと思ふ。

二四 國と法

尙ほその外、法華經を信ずるが爲に得られる御利益は、國家全體の方から觀察しなければならぬ。今までは個人が現在に利益を得るとか、死んで利益を得ると云つたけれども、法華經の利益は、實は日蓮聖人の言ふ立正安國で、國家全體が利益を受ける、それは團體の幸福が向上して來るのである、その事は聖人が能く言つて居られるので、法華經が盛んになつたならば、必ずやその國は昌える。國は法に依りて昌え、云々と言はれた。

二五 天祐と善徳

又モウ一つは諸天善人の守護と云ひますか、人間の力以外に於て天祐が下ると云ふことがある、法華經の教が盛んになれば、諸天善人は必ずこの國をお守りなさる。又他の方面から考へれば、その國全體の道德觀念が上るが爲に、その國は必ず昌えて行



くのであります。

二六 法華行者の志願

何れにしても法華行者が考へて居る所の利益は、この全體の事に向つて居るのである。日蓮聖人は、「良き法と良き法師と良き檀那と、この三つ寄り合ひて大願を成就すべきなり」と言つて居る。火打金と燧石とほくちと三つ寄れば火が出る如く、良き法と良き法師と良き檀那と出遇つたならば、大願を成就する、その大願は何だ、先づ「國土の災難をも攘ふべきなり」と云つて、我が日本の國家に於ける、内に於ては大義名分を破り、民心を攪亂するやうな事が除かれ、外に於ては蒙古來のやうな、日本の國家を危くすることが除かれて、益々國內に於ては立派な民心の結合が出来、外に於ては國威國光を輝かして、日本の天職を發揮する、即ち國土の災難を攘つて立正安國の實を擧げると云ふのが、法華の利益の最も勇ましく現はれた所でありませう。それから更に進んでは一天四海皆歸妙法で、その時には一切衆生悉く法華經の法益に潤ふ、日

本乃至一闍浮提有智無智を悉くばす、南無妙法蓮華經と唱へて、御利益を受けると、日蓮聖人は仰せられた、日は東より出でて西を照す、日本の佛法は必ず全世界の光明となつて、現はれると仰せられました。其處まで志を立てて、廣宣流布の大願に向つて、御利益を認めて行くのが、法華行者の御利益であります。

どうぞこの意味に於て、前に申したやうに、現在生活の全部に於ける幸福と、それから未來に於ける永遠の向上、それから國家の安泰、それから世界の人類全般の濟度されると云ふ所まで及んで、法華經の御利益を盛んに致したいと思ふのであります。之を以て完結と致します。

南無妙法蓮華經











# 法華經講義

全二冊

菊列洋裝特製函入美本  
紙數各壹千餘頁  
上各二圓三十錢  
下各一圓三十錢  
郵稅各冊十二錢

東郷元帥外朝野諸名士題字  
博士 正僧大  
本多日生日貌著  
本多日生日貌著

本書は佛敎史三千年間に現れたる法華經に關する各種の思想は悉く之を參照し法華經ケルン譯等を對照して法華の全文を詳細に解説し他面には法華經を基準として現代に要求する宗教の要義を批判し又我邦の文學史を考察して此經に關する詩歌を列擧し更に經中の要處には日蓮聖人の遺訓を引證し又科段は綿密なる圖表を附せり、序説には佛敎全般に關する要義を擧げて之を解説し、釋文には釋題、大意、文々解釋の三段に分ち、文々解釋の下には科段、通解、妙解、異解、批判、質義、解決、參考、讚唱の項目を立て、極めて懇切に之を説明せり。法華經が世界最第一の寶典たるは世既に定論あり苟くも思想の源泉を擲んで正明なる信解を得んとするものは何人も研究し讚仰すべき唯一の寶典なり。

## 國民道德と日蓮主義

三五判洋裝函入  
紙數四百八十頁  
正價壹圓拾錢  
郵稅四錢

東京 博文館發行

東京帝國大學文學部大教授  
博士 姉崎正治君著

## 法華經の行者日蓮

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、紀傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の警策と感應の法樂と、奮戦の叫びと信仰の凱歌と、參差照應の壯觀古今に冠絶す。忠實に上人の遺文に基き、佛敎史、宗教學、宗教心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に之を日本の公衆に薦む。

大判總布函入紙數六百餘頁  
筆蹟ゴロタイム(寶具 凸版)十五枚  
有像寫眞版大判地圖各一葉  
正價二圓五十錢  
送料内地一十二錢

## 法華經の行者日蓮

三六判總布天金縁函入美本  
日蓮上人眞蹟六葉挿入  
正價金八拾五錢

「法華經の行者日蓮」の「廣本」は批評研究的、今度の「要本」は解説的に要を摘むで、佛敎の術語を一々近代語に直し、又脚註で解説したもの。「廣本」以後の新研究や、以外の材料を加へて、而かも容易に通讀し得る様、「廣本」の四分一で「法華經行者」の經歷、思想、信仰、努力、血と涙との跡を傳へたのが、この一篇。

博文館發行



# 日本國體と日蓮主義

三六列洋裝上製函入  
紙數四百二十餘頁  
正價壹圓四拾錢

海軍中將 佐藤鐵太郎 述

我萬邦無比なる國體の尊嚴を解説し馨くして國民の自覺を叫び根本的に忠君愛國を唱へ併せて英傑日蓮上人の人格と教義の峻絶を鐵骨貫揚して思想の選擇と修養を奨むるものは本書也。尊嚴の國體と秀絶の教法との相抱冥合の説述は論議整然字句熱烈にして一讀正氣靈動の概を生ぜしむ。國家、社會、教育、婦人の諸問題及び神儒佛、外來思想に對する批判、並に歐洲戰亂に對する感想、青年に對する訓誡、海外發展策等滔々數萬言辯じ明さるはなし。

本多 生日 貌 著

## 修養と日蓮主義

三五列函入五百六十頁  
正價壹圓拾錢

### 本書目次

- 第一編 日蓮主義の主張
- 第二編 社會問題と日蓮主義
- 第三編 修養と日蓮主義
- 第四編 日蓮聖人と女性
- 第五編 日蓮主義より見たる大涅槃經
- 第六編 日蓮聖人の信仰
- 第七編 日蓮主義の使命
- 第八編 日蓮主義の體道用具

東京 本町 博文館

# 日蓮主義

大僧正 本多日生師著

三五列上製函入 紙數六百五十頁 正價壹圓拾錢 郵稅六錢

本書講ずる所、無量十有五萬言、第一篇には宗教の必要と其の選擇を論じ、第二篇には、我國思想史の正統を論じ、第三篇には國民道德と宗教信仰の關係を明し、第四篇には破佛論の主張を擧げて之を粉碎し、第五篇には各種の佛教觀を辯じて其實歸を證し、第六篇には釋迦牟尼の芳園を尋ねて清新なる信仰の泉を掬み、第七篇には佛教信仰の體系を論じて其の源流と分派と統歸とを辯じ、第八第九第十の三篇には一切經の神髓たる善量品の全文を講述し、第十一篇には日蓮主義に對する各種の觀察と眞意義を講明せり、又信仰者の爲に修法の次第と法華經の要品を掲げ更に本經祖書の要文を抜粹して信念の警策に供せり本書は最も堅實なる根據に立つて時代の要求を參酌せる日蓮主義紹介の絶好良書なり。

## 高山樗牛と日蓮上人

中判洋裝總クロス上製  
口給數葉紙數四六四頁  
正價壹圓五十錢 郵稅八錢

姉崎博 士山川 智應君 共著

樗牛が一生は日蓮上人の渴仰を以て終れり。上人が上行再現の自覺は、樗牛をして久遠の靈光に接せしめたり。最後の一年間に於ける樗牛氏の信仰と熱血とを集め、加ふるに況後録の註解と、日蓮上人及び樗牛の信仰に關する編者の論評を加ふ、一部日蓮主義の好指鍼にして、又實に樗牛が眞信の告白集なり。

博文館發行



大僧正  
本多生日師著

# 日蓮聖人傳

本書は、最も確實なる史蹟に憑り、聖人一代の經歷と主張とを詳説す。特に聖人の主要なる著作に對しては、一その内容を紹介し、又時代の背景たる承久の亂と蒙古來とに關しては、正確なる史實に徴して之を記述し、又後人の添加せる怪誕不稽の記事は悉く之を刪却せり、聖人を敬慕する家庭、修養の力と思想の光とを得んとする人は、速に一本を備へるべし。

中判洋装函入美本 正價壹圓六拾錢  
紙數四百七十餘頁 送料八錢

# 淫祠と邪神

三五判洋装上製  
紙數二百九十頁  
正價金壹圓  
送料六錢

博文館發行

文學士  
和田徹城君著

聖天、大黒、稻荷、鬼子母神、掃天、毘沙門、閻魔、帝釋、金毘羅、庚申、摩利支天、妙見、秋葉三尺坊等の如く、富貴榮達、息災延命の靈驗を吹聴して世人の僥倖心に投ずる神に就て、その本性を根本的に解決せんとしたるもの、印度、支那、日本に亘りて成立の因由、信仰の變遷を尋ね、或は祕密裡に傳ふる神像修法に論及し、各の神に就てその功德と價值を決定せり。これ等の神に祈禱して福德と健康を得んとする者、これ等の神の流行を見て心外する者、俗間信仰を見て國民思想を云爲せんとする人士に一讀を薦む。

大僧正 本多生日師撰述

# 大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙  
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序  
文學博士 姊崎正治先生論文

全十八卷

菊判洋装上製  
三方金線函入  
每册四百頁以上

本書は大藏經中重要な經典約壹千餘卷を撰出して、其の組織と綱要とを簡明平易に講述し且要文を翻譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要に迫れるの時この大著に接す。心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべきなり。(大正六年)

自第壹卷 改正 各册貳圓四拾錢 送料各十二錢  
至第拾八卷 定價

東京 博文館 本町



東京帝國大學文學部教授

姉崎正治先生著

# 新時代の宗教

四六列洋装 上製函入  
紙數四百六十頁  
正價壹圓貳拾錢  
送料 八錢

「大戰の爆發で世界は大震蕩し、人心は根柢からゆるぎ出した、地大いに動いて、新たな泉の湧くべき時、大破壊に續いて大建設の起るべき氣運は、蕭々として近きつゝある、人性の本然を回復し、之を文明爛熟の火坑から救ひ出し、而して人間らしい生活の新世界に人生の醇化を貫徹するは、人類今後の任務」此の任務に當るべき宗教如何。是れ本書が世の覺醒を要求する問題也。

## 根本佛教

菊列洋装紙數四百七十頁 正價金貳圓  
參照引用文並索引添付 送料 十二錢

八宗九宗多岐の佛教とその根本を尋ねれば、佛陀釋尊の大悟に發しその人格に基く、嚴密なる歴史研究に依りて、この根本佛教を闡明し、且つ其枝葉花實の依つて出づる所以を指示したるもの、即ち本書也。佛陀の一生如來の人格、世相、觀察分析、涅槃の理想、般若の空觀、法華實相觀、往生の宗教、道行の標準、僧伽の團結、布教、端緒等この一冊に盡せり。

東京 博文館 本町



325  
319

18.6.13



終

